

# 美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開<sup>(シ04)</sup>

**研究組織** 小林公治、小林達朗、二神葉子、塩谷純、江村知子、小野真由美、米沢玲、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、吉田暁子、黒崎夏央、大谷優紀(以上、文化財情報資料部)、早川泰弘(副所長)、倉島玲央(保存科学研究センター)

**目的** 絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待されるであろう。

## 成 果

- 螺鈿及び漆器類ほかに関わる調査研究、研究協議等
  - 2021(令和3)年5月13日、6月16日に都内個人蔵螺鈿漆器類について調査を実施した。7月30日にMIHO MUSEUMにて春日社に伝わる螺鈿漆器に関する聞き取り調査を行い、31日に京都角屋もてなしの文化美術館にて同館所蔵螺鈿の調査を実施した。11月1日に東京国立博物館にて中国・朝鮮螺鈿漆器の調査を東博研究員の立会いで行った。11月11日、12月3日、2022(令和4)年2月28日には同館にて南蛮漆器ほかのCTスキャン調査に参加した。1月25日に慶應義塾大学ミュージアム所蔵品調査を行った。また2月21日に東京大学総合図書館所蔵品の調査を実施したうえで3月15日に同館所蔵救世主像聖龕の塗膜調査について保存科学研究センターと研究協議を実施した。
  - 個人蔵の伝平等院須弥壇剥落螺鈿貝片を借用し、2021(令和3)年9月6日、保存科学研究センター及び外部研究者と研究協議及び調査を開始したほか、併せて個人蔵の長崎螺鈿(青貝細工)箱についても同様の体制で調査を進めた。
- 研究成果公開
  - 2021(令和3)年7月16日に開催した第4回文化財情報資料部研究会にて発表を行った。
  - 2021(令和3)年9月18・19日にオンライン開催された日本文化財科学会第38回大会にてポスター発表した。
  - 2022(令和4)年2月13日に九州大学が主催したオンライン国際シンポジウムにおいて口頭発表した。
- 研究データの整備と公開
 

『美術研究』のバックナンバーについてよりの確な文献検索と発見向上への便宜を提供するため、検索用キーワードの抽出作業を実施した。また中国関連文献について中国語インデックスの作成も進めた。このインデックスについては今後検索ページを整備のうえ公開していく計画である。



東京国立博物館での調査風景(2021年11月1日)

## 発 表

- 小林公治：「近現代日本における「南蛮漆器」の出現と変容ーその言説をめぐってー」第4回文化財情報資料部研究会 21.7.16
- 倉島玲央、早川典子、小林公治：「多変角測色計による貝類切片の分光分析」日本文化財科学会第38回大会(ポスター賞受賞) 21.9.18-19
- 小林公治：「秋草と螺鈿ー岬町理智院蔵秀吉像厨子から見る輸出品物としての南蛮漆器ー」九州大学主催国際シンポジウム「越境する文化：モノ、ひと、思想の軌跡と交流」 22.2.13